

語り継ぐことは

今、私たちの目の前に広がる穏やかな日常。それを一瞬で奪ったあの日の記憶をどれだけ覚えているでしょうか。

この春、東日本大震災から15年が経ちます。この年月は、当時生まれた子どもが中学校を卒業するほどの長い時間です。

そして、この時間には光と影にも似た2つの「時の流れ」が存在します。復興事業により大きく生まれ変わった「まちの姿」は、目に見える時の流れ。一方で、日常を取り戻す中で徐々に進んでいった「記憶の風化」は、目に見えない時の流れ。

15年前のあの日、東日本大震災を経験した方たちの心に深く刻まれた経験と教訓。そして「忘れない」と誓ったはずの記憶たち。

東日本大震災を知る世代は減っていき、知らない世代は増えていきます。

あの日に起きたこと、経験したこと、後悔したことなど、さまざまに「記憶」を言葉として紡ぎ、語り継いでいくことは、未来に起こり得る災害において、大切なのちを救うための教訓に変わります。

本特集では、その言葉を長きにわたって伝承し続ける「震災語り部」の皆さん。そして、世代を超えてその意思を受け継ぐ「中学生語り部」たちの取り組みを紹介します。

なぜ、自らのつらい経験を語り継ぐのか。なぜ、震災の記憶がない中学生が語り継ぐのか。交わるはずのなかったふたつの境界線が「言葉」でつながり「記憶の風化」に立ち向かっています。

15年という節目に立ち、改めてあの日を見つめ直し、一人一人の防災力がより高まることを願います。

いのちを守ることに



特集1 東日本大震災、15年目の伝承。

～未来へつなぐ、言の葉～

2011年3月11日、午後2時46分。
突然襲った大地震。
経験したことはない長く激しい揺れと
日常を飲み込んだ大津波。
死者、468名。
建物被害、91,180棟。

この日を境に、まちの景色も
人々の歩む道も大きく変わりました。
そして、日常の尊さと
災害に備えることの大切さを
思い知らされた日にもなりました。

この出来事を悲惨な「記録」ではなく、
明日を守るための「記憶」として
未来へつないでいる人たちがいます。

「震災語り部」

震災の記憶を伝承するため、
風化という課題に立ち向かいながら、
今日も語り継いでいます。



被災者から伝承者へ

「震災語り部」とは、自らの被災体験や事実を語り継ぎ、教訓として後世に伝える活動を行う方たちです。

2012年に結成された「いわき語り部の会」。現在は、20名の語り部たちがいわき震災伝承みらい館を拠点に、東日本大震災・原子力災害伝承館（双葉郡双葉町）の2施設で定期講話を行っています。

また、被災した現地でのフィールドワークや小中高校での出前講座、さらには全国各地での出張講話など、東日本大震災を知らない多くの方へさまざまな伝承活動が続いています。

震災を語ることは、語り部自身にとって、当時の凄惨な光景や悲しみなど、深い傷跡を呼び戻すことでもあります。それでも語り部たちが言葉を紡ぎ続けるのは、同じ悲劇を二度と繰り返してほしくないという、強い願いがあるからです。

「被災者」から「伝承者」へ。
語り部たちは、この歴史的教訓を風化から守り、いのちを守るための言葉として次世代、そして未来へつなぐ重要な役割を果たしています。

生きた「教訓」の伝承

災害が起きた時、場所や時間、そして状況に応じて、正しい判断と行動ができるでしょうか。

もし、その判断が生死を分ける瞬間だとしたら、現在の防災知識や対策だけで十分でしょうか。

語り部たちは、生死を分けた瞬間の「判断の迷い」や「後悔」についても、自身の体験をもとに語ってくれています。この実体験こそが、いざという時に人々の足を動かす生きた防災教育につながっています。

災害は、場所や時間を選ばず、突然襲ってくる。だからこそ日頃からの備えと防災への意識が大切だということ強く訴えています。

そして、語り部自身もこうした思いを正しく伝えるため、防災士の資格を取得したり、資質向上に向けた研修を開催するなど、語り部としての技術を磨いています。

あの日、生かされた命を未来にどうつなげていくか。語り部たちのこうした強い使命感は、市民の皆さんの防災意識を高め、本市全体の防災力を引き上げる礎になっています。

いわき語り部の会
大河内 喜男さん

あの日、生かされた命。
その使命はきつと、
語り継ぐこと。





言葉で、命は救える。

いわき語り部の会

幹事 小野 陽洋さん

言葉には命を救う強い力があります。これからも豊間に住み続け、自身の経験を語り継いでいきたいです。今後、震災を経験していない世代が増えていく中で、若い世代が地域で起きたことや家族が経験したことに興味を持ち、自分のルーツとして震災を知り、さらには伝えていくことで、伝承の輪が広がることを願っています。

自分の経験が他の災害で生かされていないと感じたからです。令和元年東日本台風で被災した知人が避難行動を取らなかったことを知り、伝えることの大切さを痛感しました。令和2年のいわき震災伝承みらい館の開館を機に、年少語り部(当時)としての活動を開始しました。



震災当時の状況について。当時、福島高専に在学中で、海を目の前に臨む豊間地区の自宅で80歳だった祖母と被災しました。津波が2階のガラス窓を割って大量の水が押し寄せ、腰あたりまで水に浸かる中、家が波に流されなかったおかげで九死に一生を得ました。



震災当時の状況について。

その後悔を繰り返したくない。この気持ちも多くの方に届けるため、これからも活動を続けていきます。

この後悔を繰り返したくない。この気持ちも多くの方に届けるため、これからも活動を続けていきます。



自分の後悔を

繰り返さないために。

いわき語り部の会

副会長 石川 弘子さん



語り部をはじめたきっかけは。あの日、私が住む久之浜地区は、大津波と火災に見舞われました。カメラが趣味だった私は、高台の自宅から震災の様子を記録し始めました。震災後にできた浜風商店街でその写真を展示・説明をしたのがきっかけで語り部活動を始め、これまでに伝承した回数は約3,000回にのぼります。

語り部をはじめたきっかけは。市内各地で同じ活動をしている仲間と出会い、活動の幅を広げるために震災の翌年に「いわき語り部の会」を立ち上げました。震災の教訓を伝える「黄色いハンカチ」の展示や防災訓練を交えた子どもたちへの防災講話など、防災意識を醸成する取り組みを約14年にわたり進めてきました。



東日本大震災追悼企画「みらいへつなぐ、3.11の記憶」

Event

日程 3月11日(水) 場所 いわき震災伝承みらい館 (薄磯三丁目11)

- ① 語り部講話 (11:00、12:00、13:00、15:00、16:00)
② 「奇跡のピアノ」ミニコンサート (14:00、17:00)
ピアノ: 西村 由紀江氏、フルート: 遠藤 優衣氏
③ 黄色いハンカチのライトアップ (17:30~)
④ 追悼花火 (18:30)



いわき震災伝承みらい館が「NIPPON 防災資産」に認定

Information

本市の震災経験をあらためて捉えなおし、震災の記憶や教訓を風化させず確実に後世へと伝えていくことを目的に、令和2年に開館しました。震災関連資料の収集、保存、展示や語り部の定期講話などを行っており、昨年12月には、同館における語り部活動や若年層の新たな語り部の発掘など、災害の教訓を伝承する活動が評価され、国から「NIPPON防災資産」として、優良認定を受けました。

施設案内

- 開館時間 9:00~17:00 ※入館無料
■ 休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合は翌平日)

語り部定期講話

- 毎週土曜日および日曜日、祝日の10:30~11:30、14:00~15:00 (1日2回)

震災の記憶がなくても、
聞き、学び、伝えることができる。

私たちの言葉でつないでいく。
2011年生まれの語り部として――

市立中央台南中学校。

ここに「中学生語り部」として活動する生徒たちがいます。

彼女たちが生まれたのは、震災前後の2010年から2011年。震災の記憶は当然ありませんが、生まれた年を聞かれると「震災のときに生まれた子たちだね」と言われることが多く、自分たちは「Z世代」ではなく「震災世代」と自覚するようになりました。

2023年9月、いわき語り部の会メンバーによる同校への出前講座や震災学習をきっかけに、自分たちの家族が経験したことやふるさとについて知りたいという思いが強くなり、震災について調べ、学んでいきました。

生後間もない自分を家族が必死の思いで守り育ててくれたこと、通っていた小学校が避難所として利用されたことなどを初めて知りました。

また、震災に向き合う中で、家族と防災や減災について話す機会が増えたとも言います。

彼女たちは、こうした内容を動画にまとめ発信しました。その活動の中で、自分たちの言葉でも直接発信できないかと考え、いわき震災伝承みらい館や語り部の会と連携し、2024年8月から計8回にわたり同館や小学校などで「中学生語り部講話」を実施してきました。

制作した動画も再生回数が36万回を超え、世界中の多くの人々が彼女たちの活動で震災を知り、考えるきっかけとなりました。震災を知らない彼女たちだからこそ聞き、学び、知ることで生まれる言葉があり、伝える方法があります。これからも彼女たちは自らの言葉で、この経験を未来へつないでくれるでしょう。



①語り部活動のきっかけとなった、いわき語り部の会の石塚さんへ黄色いハンカチを贈呈
②KWN日本コンテスト2024表彰式でのスピーチ ③中央台南中学校の語り部メンバーの皆さん ④小学校での語り部活動 ⑤いわき震災伝承みらい館での語り部活動



「大好きな海が愛され続けるように」

中央台南中学校3年 鈴木 ^{あおい}蒼空さん

Interview



私が語り部を始めたきっかけは「みんなの世代がやってくれるといいんだよな」といういわき語り部の会の石塚さんの言葉でした。

私は、とても大きな津波被害があった薄磯で生まれており、震災後も磯遊びや魚釣り、海水浴など、ずっと薄磯の海とつながり続けて育ってきました。

震災の記憶がない自分が語り部をすることはとても不安でしたが、大好きな薄磯の海がこれからもずっとみんなに愛され続けるように、いわき語り部の会や地域の方々から学んだこと、考えたことを自分なりの言葉で語り継いでいきたいです。

「KWN日本コンテスト2023」 中学生の部で最優秀作品賞を受賞

Topics

2024年3月、パナソニックが行う映像制作を通じて学びを支援する教育プログラム「キッド・ウィットネス・ニュース (KWN) 日本コンテスト2023」にて、中央台南中学校における東日本大震災の学びの様子をまとめた作品「Coming Back Home ～帰郷～」が、中学生の部で最優秀作品賞（グランプリ）に選ばれ、翌年には世界各国の作品を対象とした「KWNグローバルサミット2024」でもプロフェッショナルアワードを受賞し、防災への備えの大切さを発信しました。動画もぜひ、ご覧ください。



伝承

15 years

未来へつなぐ、言の葉

記憶を教訓へ

言葉が、意識を変える。
その意識は、行動を変える。

岩手・宮城・福島3県における東日本大震災の伝承団体や施設を訪れた人数は、令和5年をピークに2年連続で減少しており、記憶の風化に真摯に向き合う岐路に立っています。

消えゆく記憶と語り継ぐ記憶。この相反する記憶の狭間で懸命に活動する語り部たちの言葉は、聞いた人の想像力を防災力に変える力があります。

また、その語り部たちの意思を継ぎ、動き出した若い世代の語り部活動。世代が異なっても語り部たちの思いと言葉は共鳴し、未来へつなぐ教訓として、伝承していきます。

私たち一人一人が災害に関心を寄せ、いのちを守る意識を持つこと。その意識が行動を変え、まち全体の防災力を高めることにつながります。

日頃から防災に備えることの大切さを学んだ東日本大震災。救えるいのちを確実に救うため、何気ないこの日常生活を守るために、防災訓練への参加、備蓄品の準備、身の回りの安全対策、避難ルートや安否確認を家族で話し合うなど、私たちにできることを改めて考え直してみませんか。

そして、あの日を知る私たちは、その記憶を「自分の言葉」で大切なひとへ語り継いでいく使命があるはずですよ。



国際防災都市へ



いわき市長
内田 広之

東日本大震災から15年。犠牲になられた方、そして大切な方を亡くされた方々に深く哀悼の意を捧げます。

長きにわたる復興の歩みの中で、語り部の皆さんは震災の教訓を一人でも多くの方に届くよう、伝承を続けていきます。

本市としても、震災から得た経験を「安全に暮らせるまちづくり」に生かすとともに、全国の自治体に対してもこうした知見を届け、広めていくことが使命であり、これまで支援してくださったすべての方々への恩返しであると認識しております。

今後も災害に強いまち「国際防災都市いわき」を目指し、防災力の向上に努めてまいりますので、市民の皆様におかれましても、日頃からの災害への備えをお願いいたします。

